

# 大学キャンパスの地下に残されていた近代の痕跡

-北海道大学札幌キャンパスでの探求事例-

北海道大学埋蔵文化財調査センター・守屋豊人

はじめに

本発表の目的は、北海道大学札幌キャンパスの地下に残されていた近代の痕跡を紹介することである。当該札幌キャンパスは JR 札幌駅の北側、各学部建物が展開している縦約 2km、横約 1km の範囲、および、札幌駅の南西側、植物園が位置する約 0.5km 四方の範囲をさす。両範囲では、明治期初期からの建物が移築、新築されてきたと知られている。最近の大学構内の発掘調査では、明治期から戦前までの時期を近代とした場合、その期間の痕跡が当該札幌キャンパスの地下で確認される。以下では、大学キャンパスの地下に残された近代の痕跡を説明するため、まず、北海道大学札幌キャンパスでの遺跡と地形を説明し、次に、当該札幌キャンパス及び周辺で建てられた建築物の変遷と特徴を示し、最後に、当該札幌キャンパス内の発掘調査で明らかになった近代の痕跡の具体例を取り上げる。

## 1. 北海道大学札幌キャンパスでの遺跡と地形

北海道大学構内では、縄文文化中期～アイヌ文化期(図 1)にかけて、三つの遺跡がみられる(図 2)。一つは、植物園がある C44 遺跡である。その他の二つは、各学部および農場などが展開するエリアでみられる K39 遺跡、K435 遺跡である。C とは札幌市中央区のローマ字表記の頭文字、K とは札幌市北区の頭文字である。北海道大学札幌キャンパス内の遺跡では、北海道大学埋蔵文化財センター(および、前身の北海道大学埋蔵文化財調査室)によって、1980 年から遺跡の調査および遺跡の保護が実施され、縄文文化中期～晩期、続縄文文化、擦文文化、アイヌ文化期の遺構もしくは遺物が確認されている。

北海道大学札幌キャンパスは、扇状地の末端から低地にかけての地形に位置する。当該地形は、縄文海進時に侵食された地形に、河川(札幌市を流れる豊平川など)によってもたらされた土砂が徐々に堆積して形成された

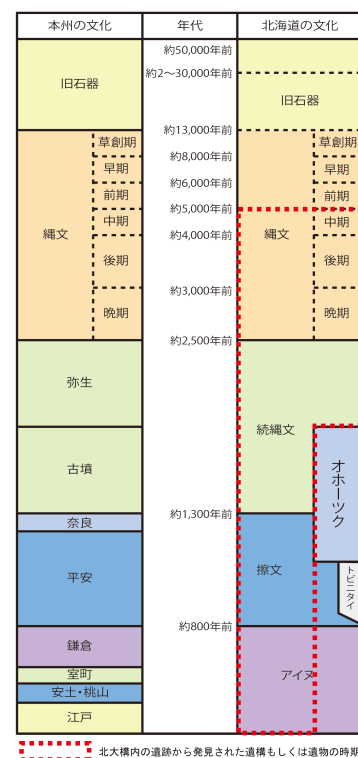


図1 北大構内の遺跡の時期



図2 北大構内の遺跡（2015年12月現在）

「北海道大学埋蔵文化財調査センター、2015、ニュースレター、第21号」から引用

沖積地である。遅くとも約2000年前には、現在と同じ地形が存在したと考えられる。

扇状地の末端では、山地で降った雨が地中に浸透して地下水となり、扇状地の末端で地下水が湧き出る状態となって湧水地が形成されていた。湧水地から流れ出た水は河川を形成して北海



道大学札幌キャンパスで蛇行していたことがわかっている。北海道大学札幌キャンパスでは、サケが遡上していた河川2本が存在していた。東側に流れていたサクシュコトニ川、西側で蛇行していたセロンペツ川である。札幌キャンパス内での発掘調査によって、遅くとも約8世紀には両河川の流れ、両河川沿いの高まりがあったと確認されている。

## 2. 北海道大学札幌キャンパス及び周辺で建てられた建築物の立地変遷と特徴

明治維新から第二次世界大戦前を近代として、北海道大学の沿革（北海道大学125年史編集室2001）を概観すると、大きく3つの段階に分けられる。一つは、1876年の札幌農学校の設立である。北海道開拓の指導者を養成する目的で創設された札幌農学校は、現在の札幌駅から約2km南側（現在の札幌市中央区北1条西1丁目あたり）に存在し、地形的には扇状地末端に位置した。当時、札幌農学校の西側約1kmの場所には開拓使札幌本庁舎があった。そのことを考慮すると、札幌の都市計画の一端として札幌農学校が位置付けられていたといえる。札幌農学校のシンボルであった中央講堂（演武場）は、北海道開拓使関連の建物を建築した安達喜幸氏によって設計されたため、開拓使関連の建物と類似する部分が多くみられる。また、畑地（現在の札幌市北区北8条西7丁目以北：現在の北海道大学構内）が、第一農場、第二農場と呼称され、札幌農学校の実践の場所であった記録がある。植物園が設計、設立されたのもこのころである。

二つ目は、農場があった周辺に札幌農学校が移転した段階である。1903年に北8条キャンパス（現在の北大構内の南半分の範囲）と呼称された場所では、農学教室、昆虫学及び養蚕教室、水産学教室の建物が新築された。以前の場所及びその周辺で市街地化が進み、手狭になったため、拠点の移動が計画・実施されたといわれている。

三つ目は、東北帝国大学農科大学への改組及び北海道帝国大学の創立である。1907年～1918年以降に施設の拡充が計画され、農科大学時では文部技師新山平四郎氏による建築物が多数建てられ、帝国大学時では、コンクリート製もしくは札幌軟石を利用して、医学部、工学部、理学部の新設に伴う建物の建築が行われた。それらと同時期には、農学部建物の改築なども進められている。時の流れとともに、その時期の建物のほとんどは上屋解体され、現在、見られない。ただし、理学部、農学部の一部の建物は現存し、実見することができる。



写真1 工学部本館（1926年新営）

## 3. 大学キャンパスの地下に残されていた近代の痕跡

北海道大学埋蔵文化財調査センターで北海道大学札幌キャンパスでの発掘調査

「北海道大学125年史編集室、2001、写真集 北大125年」から引用

を実施した際は、造成によって盛土が行われた場所などが確認される。当該地に堆積した客土を除去する段階で、近代の建物の基礎及び構築物の一部、近代に利用された食器類などがみつかると。近代の建物に関連する構造物は、赤いレンガ、コンクリートで構築されていて、目立つ。そのことから、発掘調査の過程で、写真などで記録をする場合がある。また、北海道帝国大学の文字が印刷された食器は物珍しく、回収する場合がある。

近代の構築物の一部と考えられるものには、地中に埋められた暗渠がある。1903 年に拠点を移動した北 8 条キャンパス（現在の北大構内の南半分の範囲）および農場では、サクシュコトニ川、セロンベツ川などの河川が蛇行して流れていたことから、地下水が豊富だったようである。特に農場では、じめじめした場所が多数あり、河川の流路が切り替わった際にみられる河谷では水はけが悪かった。農場が利用された際に水はけが悪いということは、作物が育ちにくく、札幌農学校の時期から問題となっていた。その状態を解決しようと試みたのが、札幌農学校で教師を務めていたブルックス氏（1877 年～1888 年在籍）である。ブルックス氏はレンガの胎土で成形し焼成された土管（長さ約 30cm、直径約 5cm）を考案した。それを連結して水はけの悪い土地の地中に埋めて、水の滞留を改善しようと試みた。その結果、成功し、低地での暗渠利用が普及したようである。戦後に設置された当該土管の暗渠の利用が北大構内の発掘調査で確認されている。

その他には、赤いレンガで構築した暖炉状の構築物、医学部の建物と関連するコンクリート製の基礎、青色や緑色の釉薬で「北海道帝国大学」と記名された食器の破片が発掘調査でみつかると。



図 3 北海道帝国大学の記名がある食器

「北海道大学埋蔵文化財調査センター、2022、ニュースレター、第 40 号」から引用

おわりに

北海道大学札幌キャンパスでの遺跡及び地形の説明をし、近代における北海道大学で行われた建物建築の移り変わりを概観した後、1903 年以降に利用された建物の基礎、構造物などが発掘調査で確認されると示すことで、北海道大学札幌キャンパスの地下に残された近代の痕跡を紹介した。大規模な建物の基礎が確認された際には、以前にどのような建物が建っていたのかを、過去の写真、施工図面で確認するよう努めている。どのような規模の建物が建っていたのかを知することは、埋蔵文化財の発掘調査の方法、手順を再検討する際に役立つ面がある。

引用文献

北海道大学 125 年史編集室、2001、写真集 北大 125 年、北海道大学。